■研究十二月往来〈255〉

五月十四日付世阿弥書状の「三村殿」について

天野文雄

現在、奈良県生駒市の宝山寺には、二通の禅竹宛の世阿弥自筆書状が蔵されている。いうまでもなく、この二通の世阿弥書状は、昭和十六年に川瀬一馬氏によって発見され、その後、宝山寺文書と呼ばれるようになって、現在は宝山寺と法政大学能楽研究所の般若窟文庫に分蔵されている金春家旧蔵文書中の白眉ともいうべきもので、周知のように、一通は流謫先の佐渡から永享七年(一四三五)に出されたらしい六月八日付けの書状であり、もう一通は、私見では、禅竹の能が大きくなったことを人伝に聞いた世阿弥が、禅竹が今は「印可」「得法」の芸位からさらに上位の「成就」直前の境地にあることを認め、そのためにはいっそうの精進が必要なことを説いた五月十四日付の書状で、川瀬氏以来、永享初年ころのものとされている書状である。このうち、後者の五月十四日付書状は、書状中に見える「補巌寺二代」が奈良県磯城郡味間の曹洞宗宝陀山補巌寺二世の竹窓智巌であることが判明して(香西精氏の論考「ふかん寺二代」『世阿弥新考』)、現在では応永二十九年(一四二二)ころに出家した世阿弥が帰依していたのが曹洞禅であったことを伝える資料として知られているが、この書状には、当時の禅竹の能が大きくなったと世阿弥に伝えてきた「三村殿」なる能数寄の武将らしい人物が二箇所に見えている。すなわち、

○三村殿、近江にての御能を一見申されて候。能が大に御なり候よし、申され候。目利きにていられ候間、疑いあるまじく候間、御心安く候。

○丹波にての御能よりハ大ニ御なり候よし、御心にも覚えさせ給て候よしうけ給候つる。又三村殿も一見申されて候。

とあるのがそれである。この「三村殿」については、宝山寺文書の発見者である川瀬一馬氏著『世阿弥自筆伝書集』の解説では「後戦国時代に其の子孫が東寺に関係のあった三村氏であらう」としているのが唯一の具体的な言及で、この書状についての唯一の注釈である『世阿弥禅竹』では、「三村殿」は「不明の人物」とされている。現在はこの『世阿弥禅竹』の注が定説となっているようであるが、右の引用にも明らかなように、この「三村殿」は世阿弥や禅竹と交流のあった能の目利きで、近江における禅竹の能を見て、その芸の変化を世阿弥に伝えている人物であり、世阿弥や禅竹の活動環境を考える場合には注意されてよい存在であろう。そこで、以下では、この「三村殿」についていささか考えたところを述べてみたい。

三村姓の氏族は、『姓氏家系大辞典』によれば十一氏に上るが、そのうち、数少ない世阿弥時代以前からの氏族中最も大きな氏族に備中の三村氏がある(『姓氏家系大辞典』では「備中の大族」とする)。この三村氏は南北朝期以前は備中成羽(なるわ)荘の「本主」であったようで、明徳年間(一三九〇～九三)に、備中成羽荘の「本主」とされる「三村信濃守」なる武将が荘園支配をめぐって守護の細川頼之や細川満之と対立していることが知られ(小川信氏『足利一門守護発展史の研究』)、それ以降は、戦国時代の武将で備中の成羽城や松山城の城主だった三村宗親(永禄十年〔一五六七〕没)をはじめとする一族の活動が諸資料から知られる。そのなかに、東寺領新見荘の年貢を請け負っていた三村修理進元親(天正三年〔一五七五〕没)がいるが(三村元親は『東寺百合文書』中の新見荘関係の文書にも所見がある)、これが川瀬一馬氏が世阿弥書状の「三村殿」の後裔とした「東寺に関係のあった三村氏」であろう。

以上が備中の三村氏の概略だが、あらためてその動向を整理するならば、三村氏は明徳ころと戦国時代の動向が知られるだけで、その間の百年あまりの室町時代の動向はまったく不明ということになる。筆者は、川瀬氏が指摘されているように、この備中の三村氏の一族の人物が世阿弥書状の「三村殿」なのではないかと思うのである(禅竹の近江での能を見ていることから、近江の三村荘とのかかわりが考えられるかも知れないが、近江の三村姓の氏族は知られていない)。もっとも、右に述べたように、三村氏は史料に所見のかぎりではもっぱら備中の武将として備中で活動しており、そのかぎりでは京都にいたらしい世阿弥書状の「三村殿」とはまったく接点がない。その点が「三村殿」を備中三村氏の一族かとする場合の最大の難点であろうが、じつは備中三村氏はその動向が不明な室町時代の百年あまりの間は、備中守護細川氏の被官であったらしいのである。そうであれば、そこには京都や畿内で活動していた世阿弥や禅竹との接点がそれなりに見いだせることにな

るわけであるが、以下、その点について述べてみよう。

備中守護は南北朝期は、南遠江、細川頼之、高師秀、宮下野入道、渋川義行、渋川満頼と定まらなかったが(小川氏前掲書)、細川満之が明徳三年(一三九二)に備中守護となってからは、永正十五年(一五一八)没の細川政春まで、百年あまりにわたって細川氏が備中守護職を襲職している(藤井駿氏「備中守護の細川氏について」『吉備地方史の研究』)。備中守護家細川氏がこれで、初代頼之から政春までは七代を数える。このような備中守護の系譜に、はやく南北朝期に備中の豪族として所見があり、百年あまりの空白ののち、戦国武将としての備中での活動が知られる三村氏の動向をかさねてみると、三村氏はその間も備中の武将として続いていて、その間の動向が不明なのは、備中守護細川氏の支配下にあったため(被官であるために史料に現われにくいということ)かと考えられるのである(備中守護細川氏支配下における細川氏と三村氏の関係については、享保四年〔一七一九〕編の『南海通紀』に永正〔一五〇四〜二〇〕ころの三村氏を「地士」「地衆」と呼んでいるのも一つの参考となろう)。なお、このように室町時代の三村氏を備中守護細川家の被官とするのは筆者だけではない。たとえば、『国史大辞典』の「新見荘」の項(三好基之氏執筆)では、三村氏を「守護勢力につながる在地武士」としている。これは上述のような南北朝期〜戦国期の三村氏の動向をもとにした理解かと思われるが、これが日本中世史研究の定説のようである。

はなはだ迂遠ながら、以上が世阿弥書状の「三村殿」を備中の武将三村氏の一族かとする卑見の根拠である。ちなみに、世阿弥書状が書かれたころの備中守護は応永十二年(一四〇五)〜永享二(一四三〇)年在職の三代細川頼重か永享二年(一四三〇)〜長禄四年(一四六〇)在職の四代細川氏久である(藤井駿氏「備中守護の細川氏について」)。そこで問題になるのは、備中守護の細川氏がどのていど在京していたかであるが、これについては、『満済准后日記』永享二年(一四三〇)正月二十五日条に、備中守護細川氏三代の頼重が狂乱の末、京都の宿所で自害しようとして未遂に終わったことがみえるのが参考になろう。これによれば、備中守護細川氏はほぼ京都に常駐していたとみてよいのではないかと思われるが、とすれば、そこに備中守護細川氏の被官であったと思われる室町時代の三村氏が在京していて、世阿弥や禅竹と交流を持った可能性も考えられることになるであろう。もっとも、そうはいっても、三村氏が備中細川氏の被官として在京していたことを示す資料があるわけでもなく、その点で以上の私説はこれという根拠のない一つの推測にとどまることになるが、その一方、私説は世阿弥時代の細川氏やその被官が能を愛好していて、世阿弥とも交流のあった事実とも呼応するもので、その点は間接的ながら、私説の蓋然性を支持するように思われる。そこで、さいごに私説の補強として、世阿弥時代の細川氏とその被官の能愛好と世阿弥との交流について概観しておくことにする。

世阿弥時代の細川氏の能愛好については、すでに応永期の管領細川満元のそれがよく知られている。『申楽談儀』十三条によれば、《松風》の「夜寒なにと」の節を改めたり、世阿弥作《実盛》の「名もあらばこそ名乗りもせめ」の「せめ」の節扱いを称賛したことが知られる(同書二十九条には、義満の補佐役だった細川頼之の御前で能を演じたときのことらしいエピソードも記されている)。これによれば、世阿弥と満元のあいだにはかなり密な交流のあったことがうかがわれる。また、細川氏の被官層の能愛好については、これもよく知られたことだが、細川満元の被官で応永期の歌人でもあった横越元久が《浮舟》を制作し、それに世阿弥が節を付している事実がある(『申楽談儀』十六条)。以上はいずれも管領家細川氏の満元にかかわる事例だが、もうひとつ、細川氏の被官層の能愛好については、細川奥州家の被官のそれがある。すなわち、『満済准后日記』永享四年(一四三二)正月二十四日条によると、その日、将軍義教の御所で能があり、「細川奥州若党共」が能五番を演じたことが知られる。同日記には、このあと同じ舞台で観世大夫(元雅とするのが定説)と世阿弥がそれぞれ一番ずつ能を演じたことが記されているが(これは現時点では世阿弥の最後の演能の記録)この「細川奥州」はこの前後の『満済准后日記』の記事を総合すると、まず確実に引付頭人家の細川満経であると思われる。そして、この細川満経の被官たちは、翌二十五日に、醍醐の三宝院に渡御中の義教のもとに、細川満元と細川満経とともに参上して、前日の能を義教からほめられ、満元、満経とともに義教から御剣を拝領して、おおいに面目をほどこしている(『満済准后日記』)。これからすると、史料にはみえないが、細川満経もそうとうの能数寄だったとみてよさそうである。

このように、五月十四日付書状が書かれた晩年期の世阿弥の周辺には、能数寄の細川満元や細川満経などの武将とその被官たちがいたのである。思うに、これらは氷山の一角で、実際には同じような事例ははるかに多かったものと思われるが、問題の「三村殿」もそうした能数寄の被官層の一人だったろうというのが小稿の推測である。

(大阪大学教授)